

生活科学習指導研究委員会

一 テーマ

対象と夢中になって関わる中で、自己発揮していく子どもの育成

二 テーマ設定の理由

上記のテーマを設定し5年目となる本年度は、「子どもと共に活動を創り出し、共に楽しみ学び合っていく生活科をめざしていこう」と委員会をスタートさせた。また、昨年度までの研究から、子どもが自己発揮していくことができる環境として、対象と夢中になって関わるができる場をつくっていくことの重要性を確認し合い、上記のテーマを設定した。

そして、研究を進めるにあたり、昨年度までの研究から示唆された次の3視点を引き続き研究の重点に据えることとした。

研究の視点

- ①対象と繰り返し関わる中でみえてくる子どもの姿とその変容
- ②子どもと共に楽しみ、学ぶ教師の関わり

上記の2つに視点について、委員それぞれの実践から追究していくことに加え、教育課程研究協議会生活科（中塩田小学校2年生）の実践からも学ばせていただきたいと考えた。

三 研究の経過

- ・第1回 5月7日（火） 研究計画立案
テーマ・研究内容の決定
- ・第2回 7月5日（金） 生活科教育課程研究協議会事前授業参観
実践報告①
中塩田小学校2年生「ようこそ年長さん②」授業参観
委員が実践レポートを持ち寄り発表・意見交換
- ・第3回 8月1日（水） 生活科教育課程研究協議会準備
実践報告②
- ・第4回 9月5日（木） 生活科教育課程研究協議会
中塩田小学校2年生「ようこそ年長さん③」
授業参観・授業研究会参加
「塩田の里交流館「とっこ館」でおやき作り講習」
講師 「とっこ館」職員
- ・第5回 10月11日（金） 実践報告③
まとめに向けた計画立案
- ・第6回 11月28日（木） 実践報告④
WEBページに掲載するレポート原稿について

四 研究内容

1 A 小学校 4年

「地域に伝わるものや人とのかかわりの中で、地域への愛着を深めていく子ども達の姿」

昨年度に続き、学校の裏に流れる川の学習を続けて来た。くりかえし関わってきた事で、子どもたちはこの川を、一番身近にある地域の宝であり、自慢であると感じている。

今年度、シンガポールから短期留学で学校に来た子と何をしたいか尋ねたときには、真っ先に「川に連れて行きたい。一緒に泳いで、魚取りをしたい。」という願いが挙がった。

楽しい川遊び、でもふと見渡すと・・・

6月中旬、計画通り川遊びにむかった。水は冷たいが、子どもたちは頭までもぐり、流れに身を任せて泳いだ。どこに魚がいるのか知っている子どもたちは、網を片手にどんどん魚を追い詰めていき、小さなカジカを捕まえた。留学に来た子にカジカを見せたいという願いを持って参加した子は「見せられてほっとした。」と笑顔を見せ、満足している様子であった。しかし、一方で流れの弱いところや岩陰をみると、ゴミが落ちているのである。

川のゴミに気づき、自分のことのように怒るSさんとMさん
Sさんは生き物が好きで、川のいいところはカジカの住めるほどきれいな水だと感じている。そんなSさんが、川にゴミが落ちていることに気づいた。すぐに拾い、担任の所へ持ってくると、怒った様子で「なんで、わたしたちの川にゴミを捨てるんだ。ひどすぎる。」と声を荒げた。担任のそばにいたMさんも拾ってきたゴミを見ると「なんでこんなきれいな場所にゴミを捨てられるんだろう。私たちの大切な川なのにひどいよね。」と同じように怒った。しばらく二人で怒った様子で捨てた人への文句を言っていた。その後、この日ゴミを見つけると担任の所に持ってきた。

「川にゴミが落ちている！」 みんなの反応は・・・

川遊びから帰って、子どもたちと川遊びのふりかえりをした。「カジカを見つけられた。」「楽しくみんなで遊べて良かった。」など楽しかった思いが出される中、SさんとMさんが「川にゴミが落ちているのを見つけて嫌な気持ちになった。」と発言してくれた。そこで、みんなに川遊びの日に拾われたゴミを見もらった。洗面器やお菓子の袋、われた瓶もあった。みんなでしばらく見た後、どう感じるか尋ねたところ、堰を切ったように、川にごみが落ちていて悲しいという思いや、川を大切に感じている気持ちが次々に出てきた。そして、「ゴミを拾いに行きたい。」という意見が出ると、みんなが「そうだね。」「きれいな川を見てもらいたい。」とその意見に賛同した。

クラス全体が「ゴミ拾いやろう!」という空気に包まれる中、Sくんが「でもさ、解決はしてないよね。」と呟いた。「拾ってもまた捨てられちゃかも。」と、他の子も心配しだした。

他の学校との交流会で見られた子どもの様子

7月の末、川遊びを実施することができた。先頭を切って川の中に他の学校の人を連れて行く姿は、とても自信にあふれていた。

川で見つけたゴミをそっと川から出すRくん

Rくんは、生き物を見つけないという願いを持ち、この日の川遊びに参加していた。他の子と岩を持ち上げたりして、楽しく川遊びに参加していた。すると、他の学校の子が川に落ちている空き缶を見つけた。その子は何気なく、また川にその缶を流そうとしているのを見つけると、「やめて。」と声をかけ、その缶を受け取った。Rくんは川の水で缶を洗い、そして川から外に出した。何気ない行動ではあるが、他の学校の人とはこの川を見つめる目が違う、そして、Rくんの武石川をきれいにしておきたい気持ちが表れている行動であった。

ゴミ拾いに出かける

ゴミ拾いに出かける。朝のうちに下見を済ませていたときには、あまり目に見えてゴミは見られず、わたしは「これは、『あまりごみなんてないじゃん。』という結論になってしまうのかな。」と思いながら川に向かっていった。しかし、子どもたちは、水の中に沈んでいるゴミ、岸の打ち上げられたゴミ、石の下にたまってしまっているゴミなどたくさんのゴミを見つけたみんなが集めてきたゴミを集めてみると結構な量に。

その後、拾ってきたゴミを種類毎に分けて、どれくらい拾えたのかゴミの体重測定をした。結果は全部で11キロもの重さになった。これだけのゴミを拾えて子どもたちは自分たちの活動に「やってよかった。」という気持ちを持ったかと思っただが、子どもたちに聞いてみると、

＊「予想以上にゴミが多くて悲しい。」

＊「たくさん拾えてしまうことが悲しい。」 と、いうものだった。

中には「使い方が悪いなら使わないで欲しい。」という子もいた。実際にそうやって使い方が悪く、閉鎖されてしまったキャンプ場があることを子ども達に伝え、「それはいやだ。」「それなら有料にしてみる?」「それでは身近な川ではなくなってしまう。」など意見が出た。

さらに追い打ちをかけるように・・・

子どもたちの意見が出尽くしたところで子どもたちに何枚かの写真を見てもらった。写真にはキャンプ場に落ちたゴミの写真が写っている。ゴミ拾いの二日後に担任がとった写真だ。子どもたちもはじめから予想はしていたことだが、ゴミ拾いをしてもまたゴミを落とされてしまうんじゃないかということが本当に起きていた。

「これからどうしていくか。自分たちにはどんなことができるか。」と言うことを聞いたがすぐに書き出せない子は当然ながら何人もいた。はじめにゴミを見つけてきたSさんもその一人。「もう一回拾いに行っても、きっとまた捨てられてしまう。ショックだった。」という思いを話してくれた。

呼び掛ける活動とこれから

その後、子どもたちは、地域の人や川に遊びに来る人に自分たちの思いを呼びかけていきたいという気持ちで、リーフレット作りをした。「武石川の良さを知ってもらおう」「ゴミが落ちている」「おねがいしていききたいこと」の三つのグループに分かれて、自分たちの伝えたいことを原稿に表していった。このリーフレットは、交流をした小学校、家族、全校児童に見てもらい、地域の人にも見ていただけるように活動を考えていたが、活動の途中、台風19号の被害を受け、川も甚大な被害を受けた。みんなの大好きだった姿とはかけ離れ、荒れ果てた様子になってしまった川。子どもたちも「今、ごみのことを

呼びかけるタイミングではない」という判断をしたことで、地域に呼びかける活動はストップしてしまった。何より、荒れた川を目にすることになった子どもたちは大きなショックを受けたようだった。それでも川のことを大切に思う気持ちは変わらず、「川の復興のために自分たちにできることがあったらお手伝いしていきたい。」という思いでいる。交流した学校へのリーフレット配布をし、今後、家族や全校児童への呼びかけを予定している。

2 B 小学校 5年

生活科で育んだ力はどうのようにいかされるか

昨年度まで1、2学年の担任をしてきて、本年度は5学年の担任をしている。そこで、「生活科で学んできたことがどのようにいかされていくのだろうか。」という観点で子どもたちの様子を見てきた。



昨年度まで、生活科の授業をしていく中で学んだことは、「子どもたちは、どこかへ出かけて行ったときに、自分から楽しみを見つけることに長けている。」ということだった。「こんな場所に行ってもなあ。」と考えていた場所でも、子どもたちはいきいきとした顔で遊び始め、繰り返し出かけることでゴミ拾いや宝物集めなど自分がしたいことを考えて出かけるようになっていった。子どもたちがやりたいことを思いっきりできる場所や時間を仕組んでいくことの魅力を感じた。



このような経験は高学年でどのようにいきてくるのだろうか。春から秋まで稲を育てる学習をしてきた。代かき、田植え、かかしづくり、稲刈り、脱穀、収穫祭。いずれの活動も泥遊び、植物を育てる、工作、餅つき（料理）など、今まで生活科で行ってきたであろう内容が含まれている。また、田の事を教えてくださる方とのかかわりもある。6か月間の取り組みの中で、それぞれの活動に意味があり、達成されるべき明確な目標があった。それぞれの活動に魅力があることを知っている子どもたちは抵抗なく活動を進めることができ、さらには楽しむということもできた。「稲刈りは花粉症が心配だから・・・」と言って参加できなかった児童も、皆の様子を見て、「脱穀は行きたい!」と願った姿もあった。



生活科において、人、もの、ことにふれていくことは、行事などに意欲的に参加する原動力になると感じた。何かを行うことは楽しいことばかりでなく、苦労もある。稲を育てる中にも、泥んこになって田をかき

まわす、足場が悪い中で、中腰で稲を植える、かかしを作るために材料を集めるなど、考えればたくさんあるが、苦勞の先にある魅力を知っているからこそ、意欲的に取り組める。このことは教室の中で担任が口で説明しても伝えることはできない。子どもたちが自ら対象にふれ、感じて考えることで培われていくことだと思う。もし再度生活科の授業をする機会があったら、このことを考えながら、とことん対象にのめりこんでいけるような場や、時間の提供をしていきたい。

3 c 小学校 2年

「自然とのかかわりの中で学ぶ子ども達の姿」

○春探し ビンゴカードを使って・よもぎだんごづくり・ よもぎ茶

昨年度は入学したてで下校も早く、春の自然に触れ合う時間が十分にとれなかったため、今年度は何度か校庭や学校周辺に出かけて春探しをした。色、におい、味、など五感を使って春を感じて欲しいと願い、そのような言葉を入れたビンゴカードを使い、春探しをした。目的をもって春探しを楽しむ様子が見られた。桜、オオイヌノフグリ、ナズナ、タンポポなど春の花を見つけたり、ホトケノザやヒメオドリコソウの蜜を吸ったりして楽しむ様子が見られた。



また、学校周辺によもぎがあるのを見つけ、「これは食べられるんだよ。」という子がいた。すると、食べてみたいということになり、よもぎ団子を作って食べて楽しんだ。さらに、よもぎでお茶が作れることを紹介すると、飲んでみたいということになった。教室でしばらく干して、からからにさせてから飲んでみた。中には抵抗があって全く口をつけられない子もいたが、大半は飲んで「おいしい。もっと飲みたい。」という反応だった。また、口をつけてみたが、「まずい、残りは捨てていい？」と感想は分かれた。この経験から、よもぎの他にも食べられる草があるということを知ることができたのではないと思う。

○生き物の飼育～ダンゴムシ・おたまじゃくし・かえる～

虫を捕まえて遊ぶことが好きな子どもが多く、休み時間には中庭でダンゴムシを捕まえて遊んでいた。中にはたくさんのダンゴムシを捕まえ、虫かごに入れて教室で飼っている子がいる。レタスなどの餌をやって、毎日欠かさず世話をして繁殖させ、卵から赤ちゃんが孵った様子を嬉しそうに担任に報告した。



また、家で捕まえたかえるを持ってきて1ヶ月近く世話をし飼う子もいた。3匹飼っていて、「あまちゃん」、「がまちゃん」、「しまちゃん」と名前をつけてかわいがり、蜘蛛やハエなどの餌もやっていた。毎日家に持ち帰って世話を続けていた。そのうち「がまちゃん」がやせ細って死んでしまい、涙を流して悲しむ様子があった。その後、残りの2匹を逃がすという選択をし、「先生、あまちゃんと、しまちゃん逃がしたよ。逃がすとき泣いちゃったけど。」と担任に話してくれた。昨年度、農園で虫捕りをした時は、捕まえることに楽しみを感じている様子があり、その後はすぐ逃がしたり、死なせてしまったりしていた。2年生では、虫に名前をつけて餌を与えて継続して世話をする様子が見られ、愛着をもって飼育する姿に成長を感じた。

また、担任がかえる好きのため、教室におたまじゃくしを持ってきて飼い始めた。本校は市街地に位置することもあり、田んぼがないためおたまじゃくしを初めて見たという子が10人近くいた。そして、おたまじゃくしを飼育していくうちに後ろ足が生え、前足が生え、気付くといつのまにかかえるになっていることに驚きと喜びを感じた子どもたちの様子が見られた。「先生、私、かえるは大っ嫌いだけど、おたまじゃくしはかわいいね。かえるは触れないから今のうちにおたまじゃくしを触っておくよ。」と話す子もいた。さらには、かえるが嫌いと言っていた子が、おたまじゃくしからかえるになったばかりのところを触りたいといって触る様子も見られた。

その後も青虫を飼育したり、カニを捕まえてきて世話をしたりするなど、生き物に興味を持って世話を続ける姿が秋まで継続して見られた。今後も生き物や野菜、花など継続して世話を続けることで発見することの苦労や楽しさを知れる機会を作りたい。

4 d 小学校 2年

1. 単元名「ようこそ年長さん③」

2. 単元設定における教師の願い

生活科「サクラとなかよし」を中心に、2学年（77名）で取り組んでいるヤギの飼育も2年目となった。

ヤギとのふれ合いや手遊び交流をして、入学への期待感をもってもらおうと、昨年1年生時と今年7月に行った「ようこそ年長さん①・②」では、自分たちで計画をした活動に取り組み、楽しさを味わえた。しかし、教師の指示を待ち、自分たちで活動を創り出していくことの楽しさまでは感じ取るに至っていないと感じている。

本単元「ようこそ年長さん③」は、前回の単元展開を繰り返しているため、子どもたちが活動の見通しをもちやすく、安心して取り組むだろう。そして、サクラへの接し方や手遊びの楽しみ方など、試行錯誤しながら創り上げていく活動の中で、子どもたち同士が考えを積極的に交流し合えるような場が仕組みやすいと考える。

本単元がよりよい「ようこそ年長さん③」となるように、友だちと考えや願いをさらに交流し合えるような場を意図的に仕組んでいく。そして、交流活動の計画表を示し、自分たちで活動を創り出したと感じられるようにしていく。これにより、①子どもたちが友と考えを交流し合いながら自ら進んで学習活動を行うことの楽しさを感じ取ってほしい。②他者（友だち・年長さん）に進んでかかわり、よりよい生活を創りあげることのよさを感じ取ってほしい。③自己肯定感を高め、前向きに生活していくこと

のよさを感じ取ってほしいと願い、本単元を設定した。

3. 各場面で願う子どもの姿 (①学習面の自立 ②生活面の自立 ③精神的な自立)

(1) 「サクラとなかよし」でやってみたいことを書き出す。 ①昨年やったことを思い出したり、サクラの成長を見つめたりする中で、意欲的に書き出す子ども。 ②やってみたいことを友に伝えたり、友のやってみたいことに興味をもって聞いたりする子ども。 ③やりたいことを話し合いにより決め出し、今後の活動に喜びを感じる子ども。	(2) 「ようこそ年長さん②・③」の準備をする ①「ようこそ年長さん②・③」でやりたいことを考え、考えた内容や方法を表現し伝えていく子ども。 ②自分の分担や手遊びを練習し、自分たちで準備する子ども。 ③年長さんが楽しんでもくれることを想像して、準備することに喜びを感じる子ども。
(3) 「ようこそ年長さん③」 ①「ようこそ年長さん③」の成功のために進んで活動に関わっていかうとする子ども。 ②自分たちで立てた計画をもとに、協力し合っ て 交流会を進めていこうとする子ども。 ③交流会が成功したことに喜びを感じられる 子 ども。	(4) まとめの活動 ①自分たちの計画に協力してくれたり、支えてく れたりした人に感謝の気持ちを表す子ども。 ②言葉で喜びを表現し、それを伝え合うことで、 うれしい気持ちを共感するよさを感じられる 子ども。 ③自分たちが進めてきた活動に満足感をもち、次 の活動への意欲を高めている子ども。

4. 学習指導要領の内容と単元目標・評価規準

(1) 内容

学習指導要領内容 (8)	知識及び技能の基礎	思考力・判断力・表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
	自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かる。	自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができる。	自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、進んで触れ合い交流しようとする。

(2) 主目標

年長さんとの交流会を計画し交流する活動を通して、年長さんのことを想像しながら交流会の内容を工夫し、年長さんに関わることのよさや楽しさに気付くとともに、進んで年長さんと触れ合ったり交流したりできるようにする。

(3) 具体目標 (評価規準)

単元の評価規準	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	年長さんに関わることのよさや楽しさに気付いている。	年長さんのことを想像しながら交流会の内容を工夫している。	進んで年長さんと触れ合ったり交流したりできるようにしている。

5. 単元展開の概要 (全6時間)

主な学習活動と留意点

昨年度および「ようこそ年長さん②」からのつながり ①分担をして交流会の準備をしてきたことで、楽しい交流会を開くことができた。 ②年長児との交流会やサクラのお誕生日会などを繰り返し取り組んできたことで会を開くコツをつかみ、上手に会を開催できたことに成就感を抱いた。 ③立てた計画が時間ギリギリになってしまったり、ヤギとの触れ合いの時間が最終班のみ時間短縮になってしまったりし、時間の見通しがもてなかった。 ④恥ずかしがって声が小さくなったり、緊張して出番を忘れたりして、他者への分かりやすく伝えるという点では、工夫する必要があった。
--

↓

働かせる見方・考え方
・計画したことがすべて実行できるように、交流活動の計画表を示し、常に計画に返って活動を確認しながら主体的に取り組めるようにしていく。 ・年長さんに「楽しい」と喜んでもらえる会にするために、他の班の手遊びや触れ合い方法と自分たちの班が行っている方法を見比べたり、上手にできるコツについて考えを交流させたりする。 ・お手紙の返信から得られた年長さんの気持ちや希望を、意識して交流会に生かしていく。 ・自分（たち）の考えた方法がよりよい方法なのかを問い返し、気付きの質を高めながら、交流活動に取り組んでいく。 ・お互いに名前呼び合い、名前呼び合う温かさや心地よさを感じられるようにする。

↓

段階	学習活動	時間	活動の実際
思いや願いをもつ／活動や体験をする／感じる考える／表現する	①返信を読み合って、年長さんの気持ちや希望を理解し、交流会③への気持ちを高めよう	1	○寄せられた年長さんの声は「やったことのない手遊びだったので、戸惑ってしまった。」「サクラちゃんにエサをあまりあげられなくて残念だった。」「遊ぶ時間が少なかった。」だった。 
	②「ようこそ年長さん③」でやる内容と方法を決めよう。	1	○年長さんより出された気持ちを全員で話し合い・共有し、遊びは7月の交流会のものを繰り返し行い、ふれ合い時間を長くすることに決まった。 
	③係ごと準備を進めよう。	1	○「花いちもんめ」の上げる足の高さは、「高すぎると年長さんにとって怖く感じるのではないか。」「遊びの順番は決めたけど、自分たちは年上だから「どんな遊びがやりたい?」と声掛けをするところから始めたらいいのではないか。」等、繰り返すことから見えてきた気付きを生かすことができた。 
	④リハーサルをしよう。	1	○手遊び時の確認では、グループ内で相談し、年長さんに見立てた児童を配置し、名前と呼ぶ練習をしたり、年長さんの位置を確認したりして、思いを寄せたリハーサルとすることができた。 
	⑤「ようこそ年長さん③」をしよう。（本時）	1	○年長さんが喜ぶ交流会のイメージ（自己紹介時間をつくる、名前によぶ、笑顔を絶やさない、声掛けは2年生から、待たせない等）を全体で共有した。 ○名前呼び合える関係になっており、子どもたちの思いの深さを感じると共に、繰り返し交流してき 

	⑥活動を振り返ろう。 ○活動を振り返り、友だちと考えを交流しよう。 ○心に残ったことを文で表そう。	たことの価値が表出していた。 ○1回ではなく、同じ人と継続して活動してきたところに意義があったか。お別れの時に班の全員が年長さん一人一人にハイタッチをしたり、「またね。」と笑顔で話したりする姿や表情が、微笑ましかった。 1 ○グループで1枚、年長さんにお礼の手紙を書いた。自然と筆が進み、楽しかったことを書きながら、○○さんが喜び そうなイラストも、うれしそうに描いていた。“来春の入 学を待っています。”心を込めて、そんな結びのお手紙を 書くことができた。 
--	--	--

↓

次単元へのつながり：サクラの発情をよく観察し見極め、3月の赤ちゃん出産への準備をしよう。

6. 成果と課題

○年長さんと繰り返し交流することで、気付きの質を高めながら、年長さんに対する思いを深め、より相手意識をもてるようになっていった。そして、交流会を通して、身近な人と関わることの良さや楽しさを実感でき、価値ある交流活動になった。

●教師が、子どもたちの学びをどのように価値づけながら自身の変容や成長に気づくよう働きかけるか。（振り返りの場面での子どもたちへのフィードバック）

7. 当日の本時案

（1）本時のねらい

交流会のリハーサルを行う中で、願いに寄せた交流会にするための課題をつかんだ子どもたちが、一人一人自分の願いをより確かにもち、計画してあった遊びやサクラとのふれ合いをしたり、場にふさわしい声がけをしたりすることを通して、自分たちの願いに近づけた交流会に喜びを感じることができる。

（2）本時の位置 6時間扱い中の第5時

前時・・・リハーサルを行い、課題をつかみ、新たな課題を抱いた。

次時・・・活動を振り返り、友と考えを交流する。（→年長さんへお手紙を書く。）

（3）指導上の留意点

- ・一人一人の願いは、リハーサル後の前時に学習カードに書かせ、発表させておく。
- ・「自己紹介」「手遊び」「サクラとのふれあい」は各クラスの生活班で動き、その他は『サクラ となかよし』の8つの係で動くこととする。
- ・サクラとのふれあい時間は、教師の方で把握・声がけをし、時間内に行えるようにする。
- ・年長児の動物アレルギーは事前に把握しておき（7月現在：なし。転入園児に要配慮）、適切な対応をする。また、エサやり体験時に噛まれないよう、長さを確保したエサを用意する。
- ・ヤギのサクラと必要な用具は、研究協議I後半の時間に、触れ合い場所である体育館南側に

移動させておく。（ただし、天候等により、臨機応変に対応する。）



(4) 展開

	学習活動	○予想される児童の動き ●教師の支援・評価	時間	備考
願いをもつ 活動する 考える 表現する	1. 交流会をする	【学習問題】 年ちょうさんに、よろこんで もらえるような、こうりゅう会に しよう。 【学習課題】 あそびのじゅんばん、エサのやり方、声かけを大切にして、手遊びやサクラとの触れ合いを楽しんでもらおう。	4 5	・移動式黒板 ・学習カード ・探検バック ・筆箱 ・計画表 プログラム (拡大掲示用) ・タイムタイマー (時計) ・紹介用写真
	(交流会プログラム) ①はじめのことば ②だいひょうあいさつ ③サクラのしょうかい (けんこうかんさつ・えさとうばん かかり) ④こうりゅう会でやることのせつめい ⑤こうりゅう (18のグループごと) [☆じこしょうかい ☆サクラとのふれあい ☆手あそび] ⑥かんそうはっぴょう (2年生3名、年ちょうさん3名)	*しかい ●サクラとのふれあいは、各クラス1班からとし、時間は5分ずつとする。●サクラとの触れ合い時間は、教師が把握し、声かけをする。	8	・学習カード ・探検バック
	2. ふりかえる ⑦おわりのことば	●「自分のめあて」に対して、どうだったかを振り返り、学習カードに書かせた上で、発表させる。 ○年長さんに優しく声をかけ続けたら、しゃべってくれるようになって、うれしかった。 ○年ちょうさんに分かるように手遊びの説明をしたら、友だちも、年ちょうさんも「分かりやすかった。」と言ってくれ、楽しくあそべてうれしかった。 ○また、交流会をやりたい。	2	
	3. 年長さんと「さよなら」をする	●「ありがとう」「また会いましょう」の思いを伝えられるようにする。 ○今日は楽しかったよ。また、交流会をやろう。 ○気をつけて帰ってね。 *評価：交流会そのものにやり甲斐や喜びを感じることができたか。		

(5) 授業の視点

①一人一人が年長さんに向き合う場面で、自分の年長さんに対する思いを深めながら、工夫して活動をしているか。

②交流会を位置づけたことは、身近な人々に関わることのよさや楽しさが分かる価値ある活動となったか。

フリマを開きたい！！～その目的に立ち止まった子どもたちの姿から

子どもたちがクラスのお楽しみ会を開くために、自分たちでやりたいことを考え準備していこうとした場面で、思いがけずに生まれたフリマ開催計画。「自分たちのお楽しみ会のためにお金を稼ぐ」という目的で始まったこの計画でしたが、具体的に準備を進めていく中で「本当に自分たちのお楽しみのためだけでいいのかな？」という悩みが生まれました。以下は、担任と子どもたちが、フリマを開催するに当たって立ち止まり考えた一コマのエピソードです。

（１）５－１ お楽しみ会を開きたい

事の始まりは、レク係さんが言った一言「先生、みんなでハロウィンやりたい」でした。「レクの時間を使って、みんなが楽しめるようにやるならいいよ」と言ったところ、みんなで楽しめるレクを考えてハロウィンの日に遊ぼうということになりました。やりたいことを出し合っていると、室内レクやおやつ作り、ビンゴゲームなどたくさんのアイデアが出されました。



「どれもおもしろそうだからやりたいんだけど…」の

声が上がリ、１０月のハロウィン・レクと１２月のクリスマス会の２回を「５－１のお楽しみ会」として行うことにしました。１０月のハロウィン・レクは、教室の中でできるレクリエーションをして楽しみました。全員が納得できる遊びを決めだしたり、グループを作ったりするには時間がかかりましたが、当日はみんな笑顔で楽しむことができました。

さて、次の１２月のお楽しみ会では、（ビンゴゲームやプレゼント交換、できればおやつ作りもしたい）という気持ちの子どもたち。「先生、おやつとかビンゴとかお金がかかってもいい？」の問いに、「会費集めるとか学年費から出すこともできるけど、何か工夫がほしいなあ」とつぶやくと…

（２）自分たちで使うお金だから自分たちで何とかできないか？

「みんなで読まなくなった本を古本屋さんに売ってお金にしたら？」「だったら、家にある使える物を持ち寄ってフリーマーケットみたいなことをするのもいいんじゃない？」自分たちで使うお金だから、自分たちで何とかできないか…そう考えた子がいました。（もし、そういうことができればおもしろいだろうな）そんなことを思いながら、その子たちの話を聞いていました。「みんなはどう思うのかな？」クラスのみんなに投げかけると「おもしろそう」「やってみたい」の声が上がりました。「５－１フリーマーケットをしてみたい」という思いが子どもたちの間に立ち上がり始めました。

（３）自分たちのお楽しみのためにするフリマでいいのかな？

「先生、もしフリーマーケットができるなら、１１月に参観日があるでしょ。お家の人たちが来るから、そこでやれないかな？」具体的な日にちまで考え始める子がいました。（すごい、本気でやってみたって考えているんだ）と思わず感心しました。同時に（でも、本当にできるのかな？やっていいのかな？）という気持ちも担任の心に残りました。

この段階で、学校の許可やお家の方の理解は取り付けていないし、具体的にどんな段取りで進めてい

くのかはノープランのまま…さらに、自分たちのお楽しみ会の費用をフリマで稼ごうということが、自分たちの都合に合わせて手軽にお金を稼ぐ方法を探していることになりはしないか…などなど、担任の中に不安な気持ちがあったのです。校長先生や教頭先生に相談する中で「子どもたちの中から生まれた気持ちだから大切にしたい」「自分たちのために小遣いを稼ぐ感覚ではなく（それが悪いというわけではないが）、活動を通して何を学んでいけるかを考えることができればいいな」というアドバイスを頂きました。その通りだなと思い、子どもたちにも担任の不安をそのまま伝え、みんなはどう考えるかを聞いてみる必要があるのではないかと思います。

（４）それでも、フリマをやってみたい！

子どもたちに話をしようと思っていたとき、JAからもち米の精米ができたという連絡が入りました。収穫祭と全校の給食につかっても、まだあまりがあるぐらいの収量だとのことでした。この話を聞いて、自分たちで働いて収穫したもち米なら、販売して自分たちのクラスのための活動費に充てるのも悪くないのではないかと。お楽しみ会の費用は、もち米の販売でまかなってはどうか？

担任の話を子どもたちは真剣に聞いていました。「確かに、フリマで自分たちだけお金を稼いで楽しいことをするって、ずるいって言うか」「お米だったら自分たちで作ったものだから、お楽しみ会に使ってもいいかも」子どもたちの中にも、担任が感じていたのと同じような気持ちがあることを知り、なんだかホッとしました。そのとき「でも、正直言えばフリマをやってみたかった」という声が上がりました。「正直言えば」という言葉に何か思いが込められているように感じ、「みんなは、お楽しみ会のお金にならなくても、フリーマーケットはやってみたいって思うの？」と聞いてみました。「学習としてやりたい」すごい言葉が飛び出しました。そして、全員が「やってみたいと思う」と手を挙げました。

（５）台風１９号で被害に遭った人たちのこと

「本当に、この活動がみんなにとっての学習になったらすごいことだ。ねえ、じゃあ、このフリマは何のためにやるってことになるの？お金を稼いでどうするの？」そう問いかけ、考える時間を取りました。子どもたちの間で、自然といろいろな声が飛び交いました。「台風１９号で被害に遭った人たちがいるから、その人たちの役に立てたらいいと思う」「別所線の復旧のために寄付したらいいと思う」「首里城が火災で焼けちゃったから、再建のために寄付したらいいと思う」という意見が出されました。その中でも、「長野県北部で浸水被害に遭った人たちのために」という意見と「別所線の復旧のために」という意見が、大きな意見としてあげられました。

S 1 千曲川が決壊して、広い地域で水浸しになって、家とか電化製品とか壊れて困っている人たちがいるから、その人たちのためにつかったらいい。

S 2 高校生や地域の人が別所線を使っていて、それが今までの通りには使えなくて、バスも時間が変わっちゃうから困っているから、別所線の復旧に使いたい。

S 3 私も、身近で便利に使っていたし、家族も使っている別所線に。

S 4 別所線は地域の大切な宝だし、全国にもファンがいるから、早く元に戻って全国の人にも来てほしい。

S 5 別所線は１年で復旧っていうけど、少しでも早く直ってほしい。

S 6 千曲川が決壊で、穂保地区とかその周りの人たちは、本当に困っていて今何もできないでいるから、お金があれば生活できると思う。

S 7 浸水して掃除をしたり、学校も自分の学校に行けなかったり、亡くなった人もいるし…浸水地域の人たちの方が大変かなって思う。

S 8 別所線は1年で復旧ってニュースで言ってたから、お金は目途がついているってことじゃないの？

S 9 えっ、そうなの？だったら、話は変わってくるかも。

S 10 先生、どうなの。分かる？

(担任、上田交通に電話をして確かめる)

T 1 今、電車の変わりにバスを運行させているんだけど、そのために使うお金については何とかなっているんだけど、壊れた橋を直して元に戻すことについては、今のところいくらかかるか分かっていないそうです。

S 11 でも、1年で直るんでしょ？

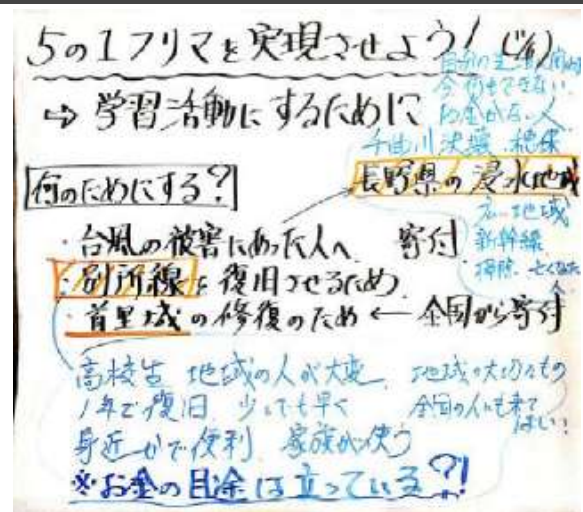
T 2 それも、「1年で直したい」という目標はあるけど、実際は分からないようです。

S 12 だったら、やっぱり別所線の復旧に…

この話し合いを経て、多くの子が、別所線は身近にある大切な施設であると同時に地域の宝と考え、自分たちの力で少しでも役に立ちたいと考えたことが伝わりました。普段、何気なく見たりかかわったりしていたものが、自分たちにとってどれだけ大切なものであるのかを改めて感じられた場面にも思いました。そこで、今回は別所線復旧のために売り上げを寄付しようということにしました。

県北部の浸水被害に遭った人たちのためにと考えていた子たちは、その結果に同意はしてくれましたがなんとなく浮かない顔をしてました。どうしてかなと思

い、何人かの話を聞くと「お母さんが実際ボランティアに行ってきたんだけど、すごく大変な様子が伝わってきて…」「私もお母さんと話をしたとき、家が水浸しになっても床下浸水だとお金がもらえないって聞いて、それは大変」と、浸水の被害の深刻さを自分事として捉えようとしていることが伝わってきました。そう思うと、長野県北部の浸水被害のためにと主張していた別の子たちも、「実際に災害が起きた場所の近くに住んでいたことがある子」だったり、「家の用事で災害直後の長野市に行った経験のある子」だったりしたことに気付きました。子どもたちは、その子の経験や環境に応じて、大切にしたいと思える事柄や見えている風景が違うのだということをお伝えされました。



(6) いよいよ明日「cinq un marche」開店！

今週は、明日開く5-1フリーマーケット「cinq un marche（5-1の市場）」の準備に時間を費やしてきました。

月曜日には、各ご家庭から持ち寄った商品を机の上に並べて、販売コーナーをどうするか決めました。その結果「文房具・おもちゃ」「本」「日用品」「洋服」の4コーナーが立ち上がり、コーナー担当者を決めての「値付け」へと進みました。この値付けがとても難しく「何円にすればいいのかな？」と悩む子どもたち。その中でも「これは新品だから、もう少し高くてもいいかな」「洋服は秋冬物のほうが高くてもいいんじゃない？」と、生活の中で培ってきた「目利き」ぶりを発揮する姿が見られて頼もしく感じました。



火曜日からは、各コーナーで準備したいものを出し合い、「看板」「レジ」「値札」を分担して作るようになりました。「後半になって売れ残ったら値引きしよう」と「10円引きの看板も作ろう」作戦を立てながら準備を進める様子や、「先生、もうシミュレーションはバッチリ！」と当日を待ちわび、自信をのぞかせる声も聞かれました。「大盛況になるかもしれないし、その反対もありうるよ」取らぬ狸のなんとやらにならなければよいのですが…。



今回のフリマでは、同時に「別所線早期復旧のための署名活動」をすることにもしました。この活動は担任から紹介し、クラスみんなにやってみたらどうかと提案しました。最初、子どもたちは「署名って何？」「名前書いてどうするの？」とピンと来ていませんでしたが、「署名活動は、自分たちが生活する中で、こういうことを実現させたいと願った時、それが多くの人のためになることであれば、その願いを市や県や国に直接伝えるための活動」と説明をすると「いいね」「やってみよう」と賛成の声をあげてくれました。自分たちが社会に参画できる場面や方法を持っているということ…このことは教科書的にはもう少し学年が上がってからの学習なのですが、今回の5-1フリマ活動が、そういった学習が実感をもって感じられるための小さな一歩になったらすごいことだなと思っています。

(7) 「cinq・un marche」大成功！！

「これ本当に全部売れたらいいな～」その言葉が現実になりました。

当日、片付けを終えて廊下を歩いていると「本当に全部売れて感動しちゃった」「夢じゃないよね！」という子どもの声を聞きました。目をキラキラさせて本当に嬉しそうに話す姿を見て、自分たちでやりたいと思ったことを、自分たちの考えた方法で、自分たちが納得できるまでやってみることが、子どもたちの心の中に大きな感動や満足を生み出すのだなと思われました。

さて、今回の売り上げ金と集まった署名は以下の通りです。

フリマ売り上げ金：29,593円

署名数：159筆

当初の目的の通り、売り上げは別所線早期復旧のために上田交通に寄付をします。署名は「別所線みらい応援プロジェクト」を通じて上田市長に提出します。手応えのある成果が出たことは、子どもたちにとって大きな自信になったことと思います。

五 研究のまとめと課題

1 視点①：対象と繰り返し関わる中でみえてくる子どもの姿とその変容に関わって

- (1) 自分一人の活動にも夢中になり、没頭できる子が増えていく。また、自分の活動を知ってほしいくなり、言葉や絵などで表現するようになる。
- (2) 子どものやりたいという思いを大切にし、時が熟すまでの時間を保障していくことで、子どもたちに自然と使命感がめばえてくる。
- (3) 対象と共に暮らし、共に過ごすことで、子どもたちは小さな変化に気付くようになり、自分よりも他者を想う優しさや協力が生まれてきた。
- (4) 本物に触れ、感じることは子どもたちに様々なことを教え、育んでくれる。
- (5) 小さな課題解決を重ねていくことで、子どもたちは無理なく課題と向き合い、前向きに取り組むことができ、更なる活動の意欲へとつながっていく。
- (6) 動物飼育は学級で行うことが多い。しかしその方法や教師同士、子ども同士のつながりを大事に紡ぐことで、学年での動物飼育活動が実現していくことが見えてきた。

2 視点②：子どもと共に楽しみ、学ぶ教師の関わりについて

- (1) 子どもと共に歩き、食べる。共に初めての体験をし、共に驚き喜ぶ。というように、子どもと共に夢中になって活動する中で、私たちは子どもの楽しみや学びが、理屈でなく心にしみて感じるようになっていく。
- (2) 私たち自身が、不安・感心・恥ずかしさ・驚嘆・喜びなどの感情を、子どもの行動記録と共にありのままに記録し、蓄積していく。そうすることで、子どもに対する自分自身のとらえが変化していることに気づき、表情や言葉に表れないような子どもの少しの変化も喜びとして感じるできるようになっていく。

3 視点③：振り返りの場と記録の工夫について

- (1) 活動直後に記録の場（自由に絵や言葉に表す時間）を確保することで、子どもは少しずつ少しずつ自分の感じたことを絵や言葉に表すことを自然にするようになっていった。体験したことが言葉になって表現されていくには、その子その子の時間が必要であり、体験と結びついている言葉がその子の中に蓄積されていく大切さを感じる。
- (2) 教師自身が子どもの姿を丁寧に記録していくことで、新たな子どもの姿を発見できる。

六 委員名簿

清水秀昭（推進係・神科小学校長）

山極美帆（武石小） 服部伸也（神川小） 唐木和加奈（東小） 山辺浩（中塩田小）

宮澤武志（東塩田小） 野池綾（浦里小）